

加賀谷 真理子\*1 / 長崎 裕子\*1

## 1. はじめに

メイク落としは、洗顔料では落とせないUVケア品やメイクなどを落とす際に用いられる。その歴史は比較的浅く、洗い流して落とすタイプが発売されてまだ40年ほどである。その間に、メイク落としと洗顔を別々に行うダブル洗顔は化粧をする女性の洗顔習慣として定着し、市場は拡大してきた。このような市場成長の背景には、メイクアップ化粧品の技術やトレンドの変化、また、女性の社会進出や生活環境の変化、近年では性別によらずメイクをする習慣が定着してきたことなどが挙げられる。

2000年以降、メイク落としのタイプ別市場構成率において大きな変化を誘因したのは、メイクトレンドの変化であった。それまでのファンデーションと口紅中心のナチュラルメイクが、マスカラを中心とした目元重視のメイクへと変化し、落とすべき汚れの対象に、固体脂と皮膜形成剤を含有するウォータープルーフマスカラ（油性マスカラ）や、アイライナーが加わった。このようなメイクの変化により、メイク落とし市場では油剤を直接メイクとなじませて落とすオイルタイプの使用率が急激に伸びたのである。また近年では、肌への意識が向上し、メイクを落とす際に肌を擦らず優しく落としたいという消費者が増加している。

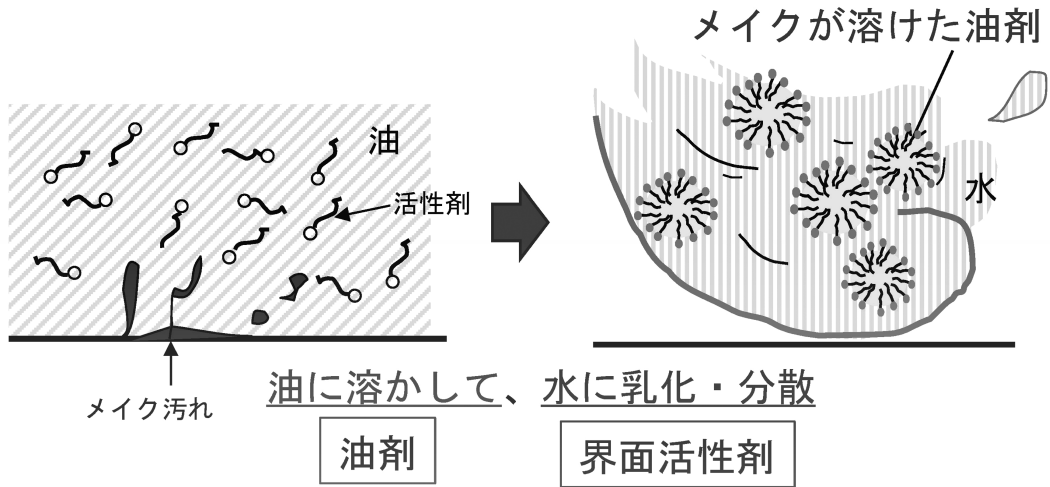
そのため、厚みを持った剤型で肌を直接接触することなく、マッサージしながら心地よくメイクを落とすことができるジェルやバームタイプ、さらにはつけるだけで擦らなくてもメイクを落とすことができるメイク落としの洗浄技術の開発などが進んできた。

本稿では、2000年以降主流となったオイルタイプのメイク落としの耐水性技術とバームタイプの特徴、マッサージしなくてもつけるだけでメイクを落とすことができるメイク自発洗浄技術について紹介する。

## 2. オイルメイク落とし製剤の進化

### 2.1. メイク落としに存在する生活の中での不充足

オイルタイプのメイク落としは、主に油剤と非イオン界面活性剤から構成される。その洗浄機構は、洗浄基剤である油剤がメイクを溶かし、その後のすすぎ時にメイクと混ざった油剤を界面活性剤が水中に乳化して洗い流す（図1）。疎水性粉体と油などの混合物であるメイクと相溶性の高い油剤を直接なじませて落とすことのできるオイルメイク落としは、定められた使用方法であれば落としにくいメイクもしっかり落とすことができる。しかし、濡れた手で使用すると、洗浄基剤である油剤が乳化されて水の中に閉じ込められてしま

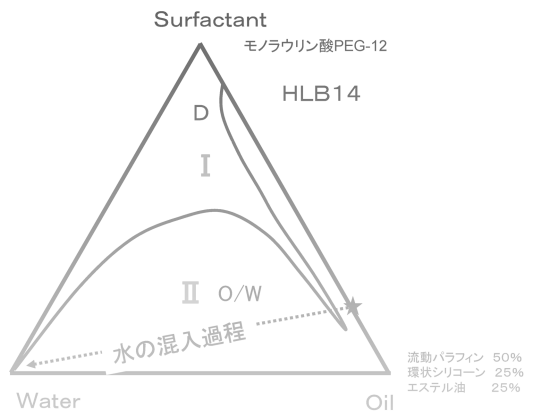


■図1 オイルメイク落としによる洗浄機構

い、洗浄力が大幅に低下する。そのため、メイクをお風呂場で落とす場合も、手を濡らさない気遣いや工夫が必要であった。この課題に対し、濡れた手を気にすることなく使用できる耐水性オイルメイク落としが提案されてきた。

## 2.2. 濡れた手でも使える耐水性オイルメイク落としの開発

濡れた手でも洗浄力を維持するためには、手についた水が処方中に混入しても乳化して油剤を閉じ込めることなく、系中に水を可溶化することが重要である。この現象は、界面活性剤の種類や組み合わせを変えて、界面活性剤/水/油剤からなる状態図を比較することで理解できる<sup>1)</sup>。



■図2 界面活性剤(モノラウリン酸PEG12)/油/水の状態図

PEG-12 (HLB 14) にオレイン酸モノグリセリド

これ以降の閲覧を希望の場合は、本誌をご購読ください。